

早春

芥川龍之介

青空文庫

大学生の なかむら 中村は うす 薄い春のオヴァ・コオトの下に彼自身の体温を感じながら、 ほのぐら 仄暗い石の階段を博物館の二階へ登っていった。階段を登りつめた左にあるのは はちゆうるい 爬虫類の ひようほんしつ 標本室である。中村はそこへはいる前に、ちよつと金の腕時計を眺めた。腕時計の針は幸いにもまだ二時になっていない。 ぞんがい 存外遅れずにすんだものだ、——中村はこう思ううちにも、ほつとすると言うよりは損をした気もちに近いものを感じた。

爬虫類の標本室はひつそりしている。 かんしゆ 看守さえ きよう 今日 ただよ は歩いていない。その中にただ薄ら寒い ぼうちゆうざい 防虫剤の にお 臭いばかり ただよ 漂っている。中村は室内を見渡した後、 のち 深呼吸をするように体を伸ばした。

それから大きい硝子戸棚の中に太い枯れ木をまいている南洋の大ガラスとだな蛇いじやの前に立つた。この爬虫類の標本室はちようど去年の夏以来、みえこ三重子と出合う場所に定められている。これは何も彼等の好みの病的だったためではない。ただ人目を避けるためにやむを得ずここを選んだのである。公園、カフェ、ステーション——それ等はいずれも気の弱い彼等に当惑とうわくを与えるばかりだった。殊に肩かたあ上あげをおろしたばかりの三重子は当惑以上に思ったかも知れない。彼等は無数の人々の視線の彼等の背中に集まるのを感じた。いや、彼等の心臓さえはつきりと人目に映えいずるのを感じた。しかしこの標本室へ来れば、剥製はくせいの蛇へびや蜥蜴とかげのほかひとりに誰一人彼等を見るものはない。たまに看守や観覧人に遇あつても、じろじろ顔を見られ

るのはほんの数秒の間だけである。……

落ち合う時間は二時である。腕時計の針もいつのまにかちょうど二時を示していた。きょうも十分と待たせるはずはない。――

中村はこう考えながら、爬虫類の標本を眺めて行った。しかし生い憎にく彼の心は少しも喜びに躍っていない。むしろ何か義務に対す

る諦あきららめに似たものに充たされている。彼もあらゆる男性のよう

に三重子に倦けん怠たいを感じ出したのであろうか？ けれども倦怠を

生ずるためには同一のものに面しなければならぬ。今日の三重子

は幸か不幸か全然きん昨日の三重子ではない。昨日の三重子は、――

山やま手線のての電車の中に彼と目礼めれいだけ交換こうかんした三重子はいかにも

しとやかな女学生だった。いや、最初に彼と一しよに井いの頭公園かしら

へ出かけた三重子もまだどこかもの優しい寂しさを帯びていたものである。……

中村はもう一度腕時計を眺めた。腕時計は二時五分過ぎである。彼はちよつとためらつた後、隣り合つた鳥類の標本室へはいつた。カナリヤ、錦鶏鳥、蜂雀、——美しい大小の剥製の鳥は硝子越しに彼を眺めている。三重子もこう言う鳥のように形骸だけを残したまま、魂の美しさを失つてしまった。彼ははつきり覚えている。三重子はこの前会つた時にはチュウイン・ガムばかりしやぶつていた。そのまた前に会つた時にもオペラの唄ばかり歌っていた。殊に彼を驚かせたのは一月ほど前に会つた三重子である。三重子はさんざんにふざけた揚句、フット・

ボオルと称しながら、枕を天井へ蹴上げたりした。……

腕時計は二時十五分である。中村はため息を洩らしながら、爬虫類の標本室へ引返した。が、三重子はどこにも見えない。

彼は何か気軽になり、目の前の大蜥蜴に「失敬」をした。大蜥蜴は明治何年か以来、永久に小蛇を啣えている。永久に——しかし彼は永久にはない。腕時計の二時半になつたが最後、さつさと博物館を出るつもりである。桜はまださいていない。が、両

大師前だいしまえにある木などは曇天を透かした枝々に赤い蕾つぼみを綴つて

いる。こういう公園を散歩するのは三重子とどこかへ出かけるよりもすうとう数等幸福といわなければならぬ。……

二時二十分！ もう十分待ちさえすれば好い。彼は帰りたいさを

こらえたまま、標本室の中を歩きまわった。熱帯の森林を失った
蜥蜴や蛇の標本は妙にはかなさを漂ただよわせている。これはあるいは
象徴かも知れない。いつか情熱を失った彼の恋愛の象徴かも知れ
ない。彼は三重子に忠実だった。が、三重子は半ほんとし年の間に少
も見知らぬ不良少女になった。彼の熱情を失ったのは全然三重子
の責任である。少くとも幻滅げんめつの結果である。決して倦怠けんたいの結
果などではない。……

中村は二時半になるが早いか、爬虫類の標本室を出ようとした。
しかし戸口へ来ないうちにくるりと靴くつの踵かかとを返した。三重子はあ
るいはひと足違いにこの都屋へはいつて来るかも知れない。それ
では三重子に気きの毒どくである。気の毒？——いや気の毒ではない。

彼は三重子に同情するよりも彼自身の義務感に悩まされている。この義務感を安んずるためにはもう十分ばかり待たなければならぬ。なに、三重子は必ず来ない。待つても待たなくてもきょうの午後は愉快に独り暮らせるはずである。……

爬虫類の標本室は今も不相^{あいかわらず}変ひつそりしている。看守^{いま}ささえ未だにまわつて来ない。その中にただ薄^{うす}ら寒い防虫剤の臭^{にお}いばかり漂^{ひら}っている。中村はだんだん彼自身にある苛^{いらだ}立たしさを感じ出した。三重子は畢^{ひつきよう}竟不良少女である。が、彼の恋愛は全然冷^ひえ切^きっていないのかも知れない。さもなければ彼はとうの昔に博物館の外を歩いていたのであろう。もつとも情熱は失つたにもせよ、欲望は残^{のこ}っているはずである。欲望？——しかし欲望ではない。

彼は今になつて見ると、確かに三重子を愛している。三重子は枕を蹴^け上げたりした。けれどもその足は色の白いばかりか、しなやかに指を反^そらせている。殊^そにあの時の笑い声は——彼は小首を傾けた三重子の笑い声を思い出した。

二時^{しじつ}四十分。

二時^{しじゆう}四十五分。

三時。

三時五分。

三時十分になつた時である。中村は春のオヴァ・コオトの下にしみじみと寒さを感じながら、^{ひとけ}人氣のない爬虫類の標本室を^{うし}後ろに石の階段を下りて行つた。いつもちようど日の暮のように^{ほのぐ}仄

暗ら
い石の階段を。

×

×

×

その日も電燈のともり出した時分、中村はあるカフェの隅に彼の友だちと話していた。彼の友だちは堀川ほりかわという小説家志望の大学生である。彼等は一杯の紅茶を前に自動車の美的価値を論じたり、セザンヌの経済的価値を論じたりした。が、それ等にも疲れた後、のち中村は金口きんぐちに火をつけながら、ほとんど他人の身の上のようにきょうの出来事を話し出した。

「莫迦ばかだね、俺は。」

話しを終わった中村はつまらなそうにこうつけ加えた。

「ふん、莫迦ばかがるのが一番莫迦ばかだね。」

堀川は無造作むぞうさに冷笑した。それからまたたちまち朗読するようにこんなことをしやべり出した。

「君はもう帰つてしまふ。爬虫類はちゆうるいの標本室はがらんとしている。

そこへ、——時間はいくらもたたない。やつと三時十五分くらいだね、そこへ顔の青白い女学生が一人ひとりはいつて来る。勿論もちろん看守

も誰もいない。女学生は蛇とかけや蜥蜴とかけの中にいつまでもじつと佇たたずんで

いる。あすこは存外ぞんがい暮れ易いだろう。そのうちに光は薄れて来る。閉館しやくくの時刻じこくもせまって来る。けれども女学生は同じようにい

つまでもじつと佇んでいる。——と考えれば小説だがね。もつとも気の利いた小説じゃない。三重子なるものは好いとしても、君を主人公にしていた日には……」

中村はにやにや笑い出した。

「三重子も生憎肥あいにくふとっているのだよ。」

「君よりもか？」

「莫迦を言え。俺は二十三貫五百目さ。三重子は確か十七貫くらいだろう。」

十年はいつか流れ去った。中村は今ベルリンの三井みついか何かに勤めている。三重子もとうに結婚したらしい。小説家堀川保吉はあの婦人雑誌の新年号の口絵に偶然三重子を発見した。三重子はそ

の写真の中に大きいピアノを後ろにしながら、男女三人の子供と一しよにいずれも幸福そうに頬笑ほほえんでいる。容ようしよく色はまだ十年前と大した変りも見えないのであろう。目かたも、——保吉はひそかに惧おそれている、目かただけはことによると、二十貫を少し越えたかも知れない。……

(大正十四年一月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：奥西久美

1998年12月11日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

早春

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>